

生徒の人間関係や社会性を育む教師の指導に関する一考察  
 - 学年団による継続的な取り組みの工夫 -

倉敷市立連島中学校 教諭  
 田中由美子

研究の概要

本研究では、中学校における生徒の人間関係や社会性を育む教師の指導について考察した。その結果、生徒の人間関係や社会性の育成に対する教師の必要感を高めたり、共通理解・共通の取り組みを促したりすることが、学年団による継続的な取り組みを可能にし、生徒の人間関係や社会性を育むのに有効であることが分かった。

キーワード 人間関係, 社会性, 必要感, 共通理解, アセスメント

I 主題設定の理由

『義務教育に関する意識調査』(2005, Benesse教育研究開発センター)によると、小・中学生自身は、よりよい人間関係や社会性について学校で教えてほしいと考えていることが報告されている。また、それらを育み、問題行動の未然防止となる予防的な生徒指導として、『生徒指導リーフ5』(2012, 国立教育政策研究所)には、健全育成型の発想に立つ「教育的予防」の生徒指導に継続的に取り組むことの重要性が示されている。今、学校には、生徒がよりよい人間関係づくりや社会性を学ぶ場や機会を設定し、その中で教師が共同して継続的な取り組みをしていくことが求められている。

本校では昨年度、生徒のよりよい人間関係を育む教師の取り組みとして、4月に第1学年全体で構成的グループ・エンカウンター(以下「SGE」という。)を実施したが、教師間でSGEのねらい等の共通理解が不十分だったため、取り組みは1回で終わり、継続した取り組みにはならなかった。年間を通して生徒間のトラブルが多く、人間関係や社会性を育む必要性を感じながらも予防的な生徒指導に取り組めていない傾向があった。昨年度を振り返って、生徒の人間関係や社会性を育むための予防的な生徒指導に継続的に取り組む必要性があったこと、そしてそのねらい等を学年団で十分に共通理解する場が必要であったことが反省点として考えられる。

そこで、予防的な生徒指導の取り組みを継続的に進めるために、校内研修のもち方を工夫して、生徒の人間関係や社会性の育成に対する教師の必要感を高めたり、取り組みのねらい等を共通理解したりすることが大切であると考えた。さらに、教師のそれぞれの捉えによる取り組みだけでなく、学年団による組織的な取り組みが、生徒の人間関係や社会性を育むために必要であると考え、本主題を設定した。

II 研究の目的

生徒の人間関係や社会性の育成を図るために、学年団の教師に必要な取り組みを考える。

III 研究の内容

本研究の進め方を図1に示す。

1 人間関係づくりの手法について

本研究では、『生徒指導提要』(2010, 文

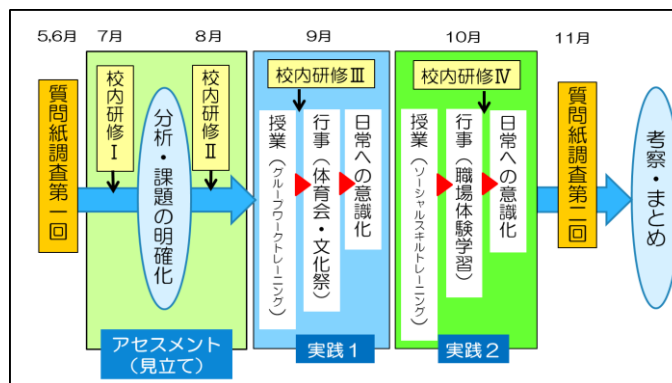


図1 研究の進め方

部科学省) に示されているSGEやソーシャルスキルトレーニング(以下「SST」という。)など「教育相談でも活用できる新たな手法等」を人間関係づくりの手法と捉え、その手法を活用した学級活動と学校行事、教師の校内研修を組み合わせ実践とした。今回は、指導の効果が期待できる次の二つの手法を学級活動に活用し、本校の学校行事と組み合わせ授業を行った(実践1, 2)。

(1) グループワークトレーニング(以下「GWT」という。)

日本グループワークトレーニング協会によると、GWTとは、グループに与えられた課題を目的に合わせて練習・訓練をする体験学習である。一般的な学習の流れは、グループでの課題解決(協力することのよさに気付く)、個人での振り返り(他者のよさに気付く)、全体での振り返り(自分のよさに気付く)、意識化・日常化、態度の変容である。この手法は、協力のよさに気付く効果があり、今回は人とのつながりが必要な体育会や文化祭を含む実践1の授業で活用した(図1)。

(2) ソーシャルスキルトレーニング(SST)

河村(2008)は、ソーシャルスキルとは「対人関係を営む知識と技術のこと」であると述べている。一般的な学習の流れは、インストラクション(目的スキルとその意義を知る)、モデリング(モデルを見てスキルの意味や具体的な内容を理解する)、リハーサル(仮想場面を設定してスキルを練習する)、フィードバック(スキルについての肯定的な助言により意欲を高める)、定着化(日常場面でのスキルの実践を促す)である。この手法は、トレーニングにより社会性を育成する効果があり、今回は社会性が必要とされる職場体験学習を含む実践2の授業で活用した(図1)。

2 本研究における工夫

本研究では、図1に示したような学年団の継続的な取り組みを可能にするために、生徒の人間関係や社会性の育成に対する教師の必要感を高め、取り組みのねらい等について共通理解を図った。図2は学年団に提案した取り組みのイメージである。まず、本校の生徒についてアセスメント(見立て)をすることで、生徒の人間関係や社会性を育む教師の必要感を高める。次に、生徒の実態に合った人間関係づくりの手法を用いた授業と学校行事を関連付けた実践を行う。そして、実践後に取り組みの効果を検証し、再びアセスメントをして、次の取り組みにつなげていくというサイクルで実践1, 2を行う。図3は実践1, 2の教師の指導と生徒の思考のイメージである。教師は手法を用いた授業の中で生徒にねらいに迫るためのスキルを教え、学校行事でスキルを生かす場をつくり、学んだスキルを日常の中で想起させて、次のスキル学習につなげる。この取り組みの中で、生徒は授業でスキルの有効性に気付き、学校行事でスキルを生かし、学んだスキルを日常の中で意識するという学びを繰り返し行うことで、教師は生徒の人間関係や社会性を育むことができると考えた。

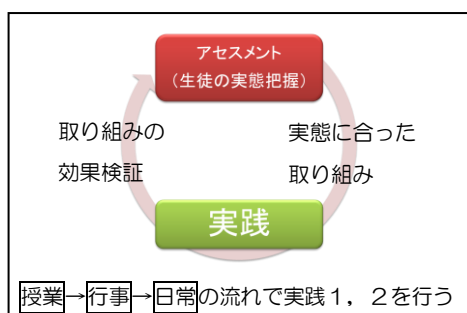


図2 取り組みのイメージ

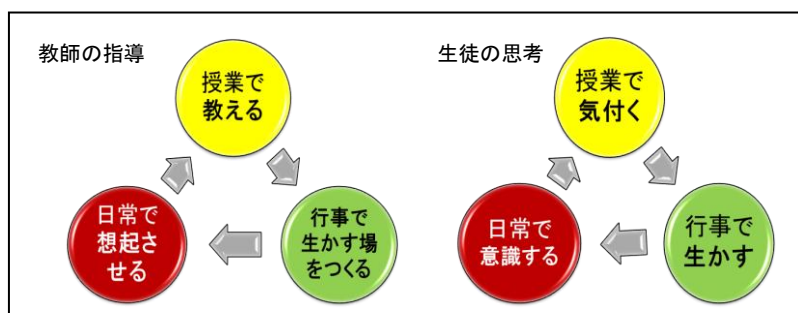


図3 実践1, 2の教師の指導と生徒の思考のイメージ

3 分析方法

本研究における教師の指導が有効であったかどうかについては、全校生徒と全教師対象の質問紙調査(第一回, 第二回)の結果、全教師対象の校内研修の振り返りの記述, 第2学年対象のワークシート等の記述, 第2学年対象の生徒のソーシャルスキル5項目の調査, 教師による観察から検討する。

## 4 取り組み

### (1) アセスメント

ア 期間 平成24年7月（校内研修Ⅰ），8月（校内研修Ⅱ）

イ 対象 倉敷市立連島中学校 参加教師30名

### ウ 研修の様子

校内研修Ⅰ，Ⅱは，人間関係づくりの手法を用いた授業を実施することに対して，教師が必要性を感じ，実践意欲を高めることをねらいとし，時間に余裕のある夏季休業中に実施した。研修時間はいずれも2時間程度とした。校内研修Ⅰでは，生徒の実態把握を目的に学年団ごとに分かれ，hyper-QUの調査結果を基に学級の分析を行った。今後の学級経営の目標と手だてを考え，学年会シートを作成することで，生徒の実態や課題を学年団で共有することができた。演習では，hyper-QUの結果と従来からの観察法で得た情報がほぼ同じであったことから，教師が意欲的に個々の生徒や学級の実態把握に努める姿が見られた。研修後の振り返りの記述でも，「(学級担任が)心配している生徒とデータがほとんど一致している」「分析を進めると，学級や個人の傾向を見付けることができるので指導に生かすことができる」といった実態把握の必要性を実感している感想が多かった。また，教師の実態把握とhyper-QUのデータが一致しない場合に，教師の捉える生徒像と生徒が捉える生徒像の相違の理由を考えることで，教師の生徒理解の広がりや深まりにつながった。校内研修Ⅱでは，生徒の実態把握から身に付けさせたい力などについて明確にし，その指導について考える具体的な提案を行った。研修の内容は「よりよい人間関係づくり」というテーマで実践1の授業で実施するGWT「先生ばかりが住んでいるマンション」の演習と実践2で実施するSSTの説明である。研修後の振り返りの記述には，「9月からさっそく取り入れたい」という前向きな意見が多かった一方で，「学級によっては実施が難しいのではないか」という，手法を用いた授業を実施することに不安を感じる意見もあった。また，SSTの説明の中で，ソーシャルスキルの未熟さと問題行動の関連を説明したところ，「生徒の問題行動をスキルの問題と捉える生徒理解の視点を獲得できた」という意見もあった。

### (2) 実践1

ア 期間 平成24年9月

イ 対象 倉敷市立連島中学校 第2学年生徒193名，第2学年団教師10名

### ウ 活動の様子

	生徒に身に付けさせる力など	授業 スキルを教える	授業と学校行事 をつなぐ手だて	学校行事 スキルを生かす 場をつくる	学校行事と日常 をつなぐ手だて	日常への意識化 スキルを想起 させる
実践1 (9月)	協力の大切 さ	「先生ばかりが 住んでいる マンション」 (GWT)	校内研修Ⅲ (指導の確認)	体育会 文化祭	体育会・文化祭 で見付けた友達 のよさ(SGE)	生活ノートへの コメントや授業 ・休憩時間等の 指導

図4 実践1の流れ

実践1の流れを図4に示す。実践1で生徒に身に付けさせる力などを校内研修Ⅱの中で明確化していたので，教師は生徒に対する指導のポイント(表1)をGWTの手法を用いた授業の中で押さえ，ねらいに迫る学級活動を行うことができた。授業の終末で，互いのよさや役割を記入する振り返りシートを学年で共通して使うことによって生徒は，「相手や自分のよさに気付く」「役割を果たすことの大切さに気付く」という思考を経て，「協力の大切さ」に気付いた様子が見られた。そして，GWTの気付きを基に体育会・文化祭のクラス目標を決め，生徒に学校行事に向けた目的意識をもたせる指導を行った。次に，授業と学校行事をつなぐ手だてと

表1 実践1のねらい

実践1で身に付けさせる力など
協力の大切さ
<b>GWTの指導のポイント</b>
・自分のもっている情報を正確に伝えることの大切さに気付く
・人の話をしっかり聞くことの大切さに気付く
・役割を果たすことの大切さに気付く

して、校内研修Ⅲを第2学年団教師を対象に行った。この研修で、スキルを教える授業で生徒が気付いたことを学校行事で生かせるように指導することや、校内研修Ⅰのアセスメントで確認した配慮が必要な生徒へ学校行事で声かけをすることなど、指導事項の確認を行った。スキルを生かす体育会では、GWTの授業で決めたクラス目標の下、生徒は学年種目の練習を頑張り、本番前に自主的に円陣を組んでクラスの志気を高めていた。文化祭でも、クラスごとの展示物作成やレポート作りに積極的に協力して取り組む様子が見られた。学校行事後に、授業での気づきを学校行事に生かしている友達を認め合い日常につなぐ活動として「体育会・文化祭で見つけた友達のよさ」というSGEを全クラス共通で実施した。実践1について、11月の生徒調査で感想を尋ねたところ「協力することは大切だ」と感じ、「コミュニケーションをこれからもっとできるようになりたい」「普段話さない人と話し、仲が良くなった」など協力の大切さに気づき、人と関わることへの意欲が感じられる内容が全記述中約70%あった。

### (3) 実践2

ア 期間 平成24年10月

イ 対象 倉敷市立連島中学校 第2学年生徒193名、第2学年団教師10名

ウ 活動の様子

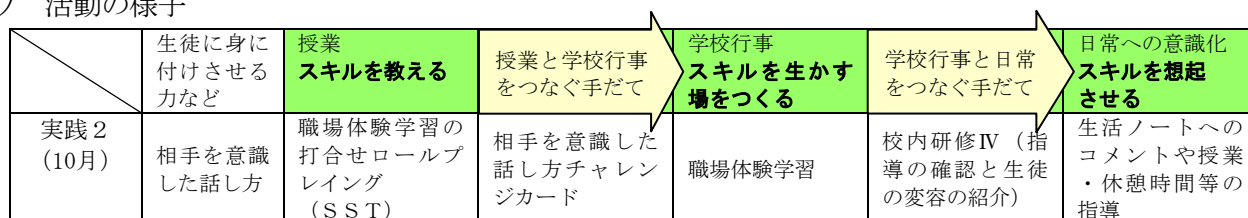


図5 実践2の流れ

実践2の流れを図5に示す。実践2の職場体験学習の打合せを想定したSSTの手法を用いた学級活動では、授業の内容が学校行事にそのまま生かせるものであったため、教師も生徒も必要性を感じて授業に臨む様子が見えかけた。手法を用いた授業や学校行事を通して身に付けさせる力などを「相手を意識した話し方」と共通理解し、ねらいに迫る指導のポイント(表2)も共通のものにした。また、授業と学校行事をつなぐ手だてとして「相手を意識した話し方チャレンジカード」の取り組みを行い、ここでもSSTの指導のポイントとチャレンジカードの自己評価欄を同じ項目にして一貫した指導にした。次に、学校行事と日常への意識化をつなぐ手だてとして、校内研修Ⅳを行った。この研修の中で、取り組みの効果を分析するための生徒のソーシャルスキル5項目(表3)を用いて指導の振り返りを行った。ここで調査したソーシャルスキル5項目は、生徒の実態調査の結果と授業や学校行事で生徒に身に付けさせたいと教師が感じているスキルを考慮してhyper-QUの項目から選択したものである。この調査で、スキルの数値が低く出ていても変容が見られる生徒がおり、その例を次に挙げる。ある生徒は、手法を用いた授業後に行ったスキルの調査で配慮の4項目(表3)を全て「できなかった」、関わりの1項目を「よくできた」と自己評価していた。しかし、手法を用いた授業後のワークシートには「なるべくゆっくり言った方が相手は聞き取りやすいと思う。また、最後にメモをとったことをもう一度職場の代表者に確認することも大事だと思う。正直言うとうまく話ができるか不安。帰ってから少し練習したい」と不安を感じながらも授業のねらいに前向きに取り組む感想を記述していた。その後、「相手を意識した

表2 実践2のねらい

実践2で身に付けさせる力など
相手を意識した話し方
<b>SSTの指導のポイント</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・声大きい</li> <li>・言葉遣いが丁寧である</li> <li>・相手の目を見て話している</li> <li>・話の内容が分かりやすい</li> </ul>

表3 調査したソーシャルスキル5項目

1	友達が話しているときは、話を最後まで聞いている	配慮
2	友達の気持ちを考えながら話をしている	
3	みんなで決めたことには従っている	
4	自分の係の仕事は最後までやり遂げている	
5	みんなのためになることは自分で見付けて実行している	関わり

ある生徒は、手法を用いた授業後に行ったスキルの調査で配慮の4項目(表3)を全て「できなかった」、関わりの1項目を「よくできた」と自己評価していた。しかし、手法を用いた授業後のワークシートには「なるべくゆっくり言った方が相手は聞き取りやすいと思う。また、最後にメモをとったことをもう一度職場の代表者に確認することも大事だと思う。正直言うとうまく話ができるか不安。帰ってから少し練習したい」と不安を感じながらも授業のねらいに前向きに取り組む感想を記述していた。その後、「相手を意識した

話し方チャレンジカード」の取り組みでは、上級生、校長や第2学年団教師等、様々な人に挑戦して、日々自己評価が上がっていった。このように自分のコミュニケーション力に気付き、自分の中でそれを高めていこうと取り組む生徒が他にも見られた。実践2について、11月の生徒調査で感想を尋ねたところ、「当日の打ち合わせのとき、とてもためになった」と、ロールプレイングの経験が職場体験学習で活用できた実感や、「相手のことを考えて話すことの大切さを知った」「普段の生活の中で頑張っていきたい」といった授業で気付いたことを日常生活へ生かしたいという記述が見られた。

## 5 結果と考察

### (1) 手法を用いた授業の必要感を高める工夫について

図6は、5月と11月に行った全学年の教師意識調査で、人間関係づくりの手法を用いた授業の必要感について尋ねた結果である。「とても必要」「どちらかといえば必要」と回答した教師が5月は69%であったが、11月は85%となり、手法を用いた授業の必要性を感じる教師が16%増えた。これは校内研修Ⅰで、データを基に生徒の実態把握をし、それぞれの教師が人間関係や社会性を育むことに必要性を感じ、さらに、その指導方法として校内研修Ⅱで具体的な見直しをもつことができたことによるものが大きい。第2学年団のみに絞って見ると、11月は5月に比べると手法を用いた授業の必要感がより高まっている

(図7)。第2学年団のみを対象とした校内研修Ⅲ、Ⅳの振り返りでは「手法をタイムリーに使うことで子どもの意識が変わってきたと思う」「学校行事を終えるごとに『与えられた役割を達成できた』『人のために役に立った』という気持ちが少しずつ出てきているのかもしれない」など、学級担任を中心に手法を用いた授業と学校行事を関連付けるよさや指導の手応えを感じる意見が多かった。予防的な生徒指導に取り組み、生徒の変容を実感するという体験から、教師は手法を用いた授業の有効性を感じたと考える。

このように、取り組みの中でデータを基にして生徒について考えるアセスメントの場の設定や生徒の変容(全体の傾向、個人の変容)をフィードバックする機会をもつことが、教師の手法を用いた授業の必要感の高まりや実践意欲につながったと考える。

### (2) 共通理解・共通の取り組みを促す工夫について

図8は6月から11月までのスキルに関する生徒の自己評価の変化である。職場体験学習までは、多少の上下がありながらも、スキルの自己評価は向上している。昨年度は学校行事に対する取り組みは学級担任裁量という傾向が強かったが、今年度はねらいや効果を明らかにした手法を用いた授業と学校行事を関連付けることによって生徒に身に付けさせる力

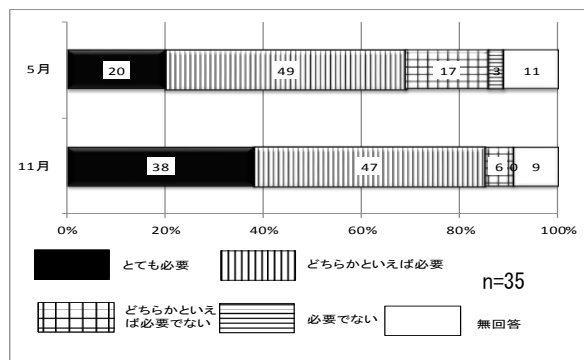


図6 教師意識調査 手法を用いた授業の必要感

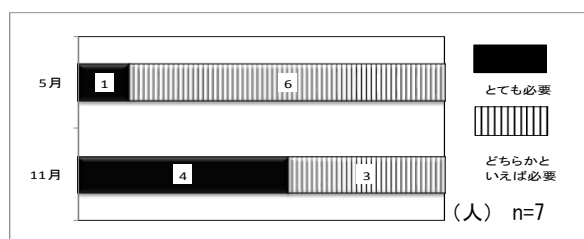


図7 第2学年団教師 手法を用いた授業の必要感

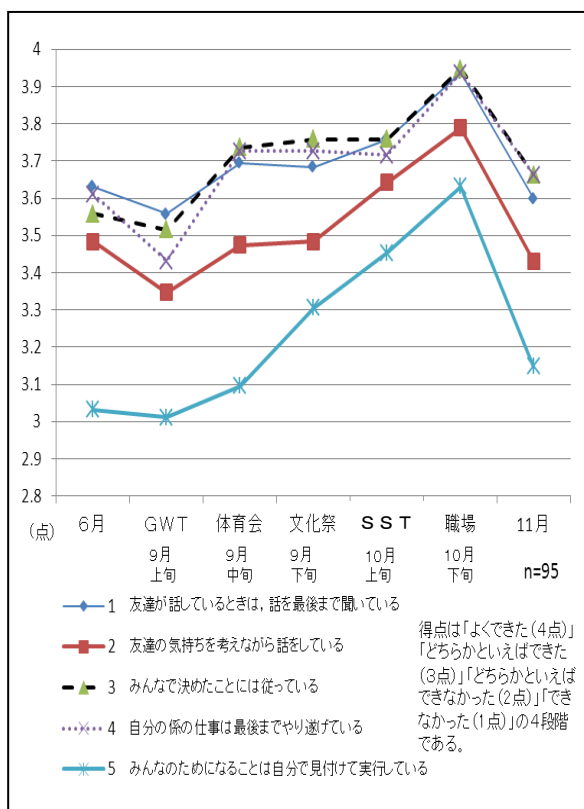


図8 ソーシャルスキル5項目の変化 (第2学年対象)

などを学年団で共通理解して指導内容を合わせ、一貫して指導することができた。このことは生徒のスキルの自己評価が向上した要因の一つと考える。

また、生徒のスキルの自己評価は、職場体験学習後の10月下旬には、項目1, 3, 4の学年平均値が3.94という最高値4に近い数値まで高まった。これは、学年団の教師がねらい等を意識して行った事前の指導が有効に働き、生徒の成功体験と結び付いたからではないだろうか。しかし、11月の調査で五つ全てのスキルの自己評価が大きく低下した(図8)。これは、実践1, 2のような計画的で具体的な取り組みが終了し、生徒が目標となるスキルを具体的に意識できにくくなったため、スキルの自己評価が下がったのではないかと考える。つまり、生徒の人間関係や社会性の育成に対する教師の姿勢や取り組みが生徒の意識に反映されたということであり、生徒に働きかける意図的で継続的な取り組みが、いかに大切であるかということがうかがえる。

このようなことから、生徒の人間関係や社会性の育成に対する教師の必要感を高めたり、共通理解・共通の取り組みを促したりすることが、学年団による継続的な取り組みを可能にし、生徒の人間関係や社会性を育むために必要であることが分かった。

#### IV 成果と課題

本研究は、生徒の人間関係や社会性の育成を図るために、学年団の教師に必要な取り組みを探った。その結果、学校行事への取り組み方が大きな節目となることを改めて実感し、「こなす学校行事」ではなく「生徒を育てる学校行事」として位置付け、授業のねらいを踏まえた上で学校行事と関連付けた取り組みが効果的であることが分かった。個々の教師は生徒をよりよくしていきたいという共通の願いをもっており、有効な方法と具体を知ることで、組織的に予防的な生徒指導を行うことが可能な集団となっていくことを感じた。

今回の実践で、学年団の継続した取り組みの方向性を得ることができたが、連携するための日常的な情報交換が十分ではないという意見があり、教師同士をつなぐコーディネーター等の必要性を感じた。今後、多忙な中でも情報交換をしたり、共通理解を図ったりして、教師同士がよりよく連携できるようにするための工夫や改善が必要である。

本校は岡山県のアトラクティブ・スクール事業の指定を受け、予防的な生徒指導の充実に取り組んでいる。今後も、本校の教師と共に、生徒の人間関係や社会性を育むために、教師の継続的な取り組みを充実させていきたいと考えている。

---

#### ○引用文献

- 1) 河村茂雄・品田笑子・小野寺正己(編著)(2008)『学級ソーシャルスキル 中学校』図書文化, p.16

#### ○参考文献

- ・ 坂野公信(監修)(1999)『学校グループワーク・トレーニング』遊戯社
- ・ 諸富祥彦(編集)(2004)『中学校 ころを育てる授業 ベスト22』図書文化
- ・ Benesse教育研究開発センター(2005)『義務教育に関する意識調査』
- ・ 埼玉県総合教育センター(2006)『ソーシャル・スキル・トレーニング(SST)に関する指導プログラムの開発』研究報告書第307号
- ・ 文部科学省(2010)『生徒指導提要』教育図書
- ・ 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2012)『生徒指導リーフ5』

#### ○Webページ

- ・ 日本グループワークトレーニング協会  
(<http://日本グループワークトレーニング協会.com>)